

動物に対する 共感性尺度の作成

動物に対する共感性尺度の作成

問題・目的部分の要約

人間と自然との関係は現代的テーマの一つである。特に動物との関係性は、アニマル・セラピーやペット・ロスなどとの関係で、その心理的利点や課題が浮かび上がっている。一方、人間同士の関係性については共感性という概念を用いることの有用性が指摘されている。そこで人間と動物の関係性についても、共感性という概念を用いることでさらに深く検討できるのではないかと考えられる。そこで本研究では、動物に対する共感性を測定する尺度を作成することを目的とする。さらに、妥当性を確認するために、動物の飼育経験、動物のための寄付行為との関連を検討する。

方法

調査対象および方法

調査対象は、愛知県にある普通科高校の1、2年生計266名（男子132、女子134）を対象として、2016年5月に調査を実施した。調査用紙のフェイスシートには、調査への協力は任意であり、またそれによって個人が評価されるものではないことを明示し、加えて調査依頼時に調査実施者から口頭で説明を行い、同意者のみに回答を求めた。

調査内容

動物に対する共感性 既存の共感性尺度（Zeisberg, 1979；堀川, 1982；一宮・岡崎, 1997など）を参考にしながら、新たに作成した。まず既存の尺度から、人間と動物との関係にも適用できると判断される項目を選出した。さらに動物を飼っている大学生34名にインタビューを行い、そこに表現された内容で動物に対する共感性と考えられる内容を加え、52項目を作成した。その後心理学を専攻する大学院生3名に、

内容的妥当性の判断や項目の類似性、表現のわかりやすさなどの検討を依頼し、最終的に20項目を利用することとした。回答は「1. いいえ」「2. どちらかといえば、いいえ」「3. どちらともいえない」「4. どちらかといえば、はい」「5. はい」の5段階で求めた。

動物の飼育経験 動物の飼育経験について、「これまで飼ったことがない」「飼ったことはあるが、現在は飼っていない」「現在、飼っている」からひとつを選択するように求めた。

動物のための寄付経験 野生動物の保護活動など、動物に関する活動を行う団体等に寄付をした経験について「ある」「ない」のいずれかを選択するように求めた。

結果と考察

本調査は、266名からの回答を得ることができた。そのうち、欠測値を含んだ6名を除いた260名分（男子129名、女子131名）の回答を分析に用いた。

まず、動物に対する共感性尺度の各項目について項目分析を行った。「はい」を5、「どちらかといえば、はい」を4、「どちらともいえない」を3、「どちらかといえば、いいえ」を2、「いいえ」を1として得点化した。項目毎の平均値、標準偏差をTable 1に示した。また項目ごとに各選択肢の度数を確認し、ある選択肢に極端に多数の回答が集中しているような項目がないことも確認した。そこで20項目すべてを用いて、因子分析（ミンレス法・プロマックス回転）を行った。

その結果、固有値の減衰状況は6.72, 2.27, 1.92, 1.30, 0.93, …であり、最大の因子数は4、スクリー基準からは3因子を抽出することが妥当であると考えられた。平行分析の結果は3因子の抽出を示唆していた。そこで、3因子解と4因子解を求め比較したところ、3因子解の方がより適切と判断できた。以上のことから、抽出する因子数を3として分析を進めた。

3つの因子を抽出する因子分析（ミンレス法・プロマックス回転）の結果、項目5, 8, 18, 20は複数因子に高く負荷していたため、これらを削除しつつ因子分析を繰り返した。Table 1に最終的な因子分析結果を示す。また因子間相関は.43～.49であり、中程度の相関関係にあるといえるだろう。

第1因子は、「動物と人間は友達になることができる」「私が悲しい時には、動物はそれを分かってくれる」「動物に触れていると癒される」などといった項目が高い因子負荷を示しており、感情、情緒に関連した内容の項目群といえよう。そこでこの因子を「感情的触れ合い」の因子と命名する。

続く第2因子には、「動物の気持ちが分かるようになりたい」「動物は人間に気持ちを分かってくれたいと思ってるはずだ」「動物に私の気持ちを分かってくれたいと思う」といった項目が高く負荷した。動物の気持ちを分かりたい、動物に気持ちを分かってくれたいといった内容を意味する項目群といえるだろう。第1因子の内容と類似している面もあるが、この因子には分かりあうことへの希求を示す項目が多い。そこでこの因子を、「相互理解希求」因子と命名する。

第3因子には、「動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方が良い」「飼っていた動物を捨てることは絶対にしてはならないことである」などの項目が高く負荷していた。人間に基本的人権があるように動物にもそれに類似したものを認め、それに対する配慮意識を表している項目群と

いえるのではないだろうか。そこでこの因子を、「権利への配慮」因子と命名する。

以上のような因子分析結果を踏まえ、動物に対する共感性尺度の下位尺度を構成した。それぞれの項目を、最も高い負荷量を示す因子を構成するものとみなすと、「感情的触れ合い」の下位尺度は6項目、「相互理解希求」および「権利への配慮」の下位尺度は5項目で構成された。それぞれの下位尺度について、信頼性係数の推定値としてCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子では $\alpha=.87$ 、第2因子では $\alpha=.80$ 、第3因子では $\alpha=.78$ と十分な値が得られた。そこで、下位尺度ごとにすべての項目を用い、項目平均値を各下位尺度得点とした。「感情的触れ合い」の平均値は2.95、標準偏差は0.83、「相互理解希求」の平均値は2.81、標準偏差は0.90、「権利への配慮」の平均値は3.70、標準偏差は0.76であった。

Table 1

項目	M	SD	因子負荷量				h^2
			F1	F2	F3		
a02	2.91	1.07	.85	-.07	-.08	.62	
a04	3.05	1.04	.82	-.08	.05	.66	
a01	3.00	1.14	.78	-.03	-.03	.56	
a06	2.99	1.01	.64	-.05	.21	.54	
a03	2.69	1.07	.63	.24	-.12	.50	
a07	3.07	1.10	.48	.08	.25	.47	
a09	2.95	1.11	-.19	.76	.16	.58	
a13	2.65	1.11	.14	.69	-.17	.48	
a12	2.79	1.20	.12	.66	-.04	.49	
a11	2.35	1.23	.03	.65	-.09	.40	
a10	3.30	1.37	-.12	.59	.17	.39	
a17	3.73	1.08	.02	-.17	.78	.54	
a15	3.54	1.08	.00	-.04	.77	.58	
a14	3.56	0.93	-.13	.10	.63	.39	
a16	3.53	1.02	.13	-.01	.60	.44	
a19	4.17	1.06	.11	.13	.38	.27	
	因子間相関		F1	.44	.49		
			F2		.43		
残余項目							
a05	2.83	1.04					
a08	3.46	1.18					
a18	2.52	1.09					
a20	3.24	1.02					

続いて、これら3つの下位尺度から構成される動物に対する共感性尺度の妥当性を検討した。まず、動物の飼育経験との関連を検討した。先行研究から、飼育経験は動物に対する意識に影響すると考えられるため、共感性とも関連すると推測できる。次に、動物のための寄付経験を検討した。共感性は社会的な活動と関連することが指摘されているため、動物に対する共感性が高いほど、動物のためになる活動が活発になると考えられる。

動物の飼育経験は、「これまで飼ったことがない」の選択者が61名、「飼ったことはあるが、現在は飼っていない」が54名、「現在、飼っている」が145名であった。これらを要因として、「感情的触れ合い」、「相

互理解希求」,「権利への配慮」についての1要因分散分析を行った。それぞれの平均値, 1要因分散分析の結果, および η^2 値を Table 2 に示す。

分散分析の結果, 「相互理解希求」においてのみ有意差が認められ, 多重比較 (Bonferroni 法, 5%水準) を行ったところ, 「これまで飼ったことがない」群よりも「現在, 飼っている」群の方が, 有意に得点が高いことが明らかになった。

次に動物のための寄付経験との関連を検討した。寄付経験のある者は 32 名, 無い者は 228 名であった。各群の「感情的触れ合い」, 「相互理解希求」, 「権利への配慮」の平均等を Table 3 に示す。さらにこれらについて t 検定を行ったところ, すべての下位尺度得点において有意な差が認められ, いずれの得点においても寄付経験がある場合の平均値が高かった。

Table 2
動物の飼育経験と動物に対する共感性との関連

	これまで飼ったことが ない (1) $n=61$		飼ったことはあるが, 現在は飼っていない (2) $n=54$		現在, 飼っている (3) $n=145$		F	多重比較	η^2
	M	SD	M	SD	M	SD			
感情的触れ合い	2.89	0.82	2.88	0.82	3.00	0.84	0.63		0.00
相互理解希求	2.59	0.85	2.70	0.85	2.94	0.91	3.96 *	1<3	0.03
権利への配慮	3.70	0.84	3.65	0.74	3.72	0.73	0.20		0.00

* $p<.05$

Table 3
寄付経験と動物に対する共感性との関連

	寄付経験あり $n=32$		寄付経験なし $n=228$		t	d
	M	SD	M	SD		
感情的触れ合い	3.38	0.78	2.89	0.82	3.13**	0.59
相互理解希求	3.17	1.07	2.76	0.86	2.50*	0.47
権利への配慮	3.96	0.64	3.67	0.76	2.08*	0.39

自由度はいずれも 258

** $p<.01$, * $p<.05$